

目次

活動報告	1
パネル発表「煩惱の根源をめぐって」	1
ブダゴーサ著作に基づくパーリ語彙集のウェブ版公開	2
研究ノート	3
阪大版ウェブディクショナリー作成までの作業報告（名和隆乾）	3
「仏教論理学・認識論関連用語の定義的用例集」の作成に向けて（三代舞）	9

活動報告

パネル発表「煩惱の根源をめぐって」

2015年9月20日（日）、高野山大学で開催されました第66回日本印度学仏教学会学術大会において、大阪大学の榎本文雄教授（バウダコーシャプロジェクト研究分担者）の主催により、「煩惱の根源をめぐって—vikalpa（分別）と prapañca（戲論）—」と題してパネル発表を行ないました。これは例年11月ごろに行っておりましたシンポジウムに代わる催しです。

仏教は煩惱の克服によって涅槃という静謐な境地を目指していたと言っても過言ではないでしょう。そのかぎりにおいて伝統的な教団仏教と大乘仏教に大きな差異はありませんが、煩惱の根源に何を見ているかということは注意深く考える必要があります。



主催者の榎本先生。司会も務められた。

伝統的には煩惱の根源は無明や貪瞋痴の三毒として説明されておりましたが、大乘仏教の論師たちは vikalpa（分別）や prapañca（戲論）に着目し煩惱の根源についてより思索を深めていきました。パネルでは、初期仏教、説一切有部、般若経、ナーガールジュナ、瑜伽行派、および仏教認識論の各専門家が、それぞれの分野における分別や戲論について文献資料に基づいて問題点を解説し、広く仏教全体を俯瞰しながら煩惱の根源について議論しました。パネリ

ストと発表題目は以下の通りです。

1. 初期仏教文献における prapañca(/papañca)
榎本文雄（大阪大学教授）
2. 説一切有部の vikalpa
一色大悟（東京大学特任研究員）
3. 初期大乘経典における vikalpa（分別）批判
-『般若経』を中心として-
渡辺章悟（東洋大学教授）
4. 中観派における vikalpa（分別）と prapañca（戲論）
斎藤明（東京大学教授）
5. 瑜伽行派における vikalpa（分別）
高橋晃一（東京大学特任研究員）
6. 仏教認識論における知覚と分別
石田尚敬（愛知学院大学常勤講師）

当日、会場には 50 名近い方にお集まりいただき、活発な質疑応答がなされました。煩惱という仏教の本質にかかわる問題に対して、現代においても多くの方が関心を寄せられていることがよく分ります。

なお、今回の発表をもとに論文集を作成する予定です。



質問に答える渡辺先生（中央）。向かって右は斎藤先生、左は一色先生。

ブッダゴーサ著作に基づくパーリ語彙集のウェブ版公開

去る 2015 年 11 月 27 日にウェブサイト *Buddha Kośa* を大幅にリニューアル致しました。今回の最

も重要な変更点は仏教用語用例集に「パーリ文献の五位七十五法対応語」を加えたことです。これはパウダコーシャ第三巻『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語』（榎本文雄ほか、2014 年、山喜房仏書林）の内容をもとにした、ウェブサイト上で参照可能な電子語彙集です。これまで、パウダコーシャプロジェクトでは、重要な仏教用語の現代語訳を原典資料に基づいて考察してきました。すでに公開されている「五位七十五法」は『アビダルマコーシャ』（*Abhidharmakośa*、『阿毘達磨俱舍論』）に、また「五位百法」は『アビダルマサムッチャヤ』（*Abhidharmasamuccaya*、『大乘阿毘達磨集論』）と『パンチャスカンダ』（*Pañcaskandha*、『大乘五蘊論』）に基づき、それらの文献に見られる定義文を抜粋、整理して、術語の語義説明に当てています。「パーリ文献の五位七十五法対応語」も同様の方法論に基づき、『ヴィスツディマツガ』を始め、アッタカター、アビダンマ、ヴィナヤ・ニカーヤの用例に至るまで、重要な術語の語義や訳語を考えるための基礎となる資料を収集し、提示しています。まずは以下の URL をご参照いただければ幸いです（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/html/index_75dharma.html）。アビダルマ文献の用例、瑜伽行派文献の用例とともに、ご活用いただければ幸いです。

なお、ウェブ上で資料を公開するための電子データの整理法については、次頁以降の「阪大ウェブディクショナリー作成までの作業報告」をご覧ください。



パーリ文献の五位七十五法関連語の索引ページ

研究ノート

阪大班ウェブディクショナリー作成までの作業報告

名和隆乾

(大阪大学特任研究員・京都光華女子大学真宗文化研究所委嘱研究員)

1 はじめに

このたび『榎本ほか 2014』¹が、ウェブディクショナリーとして公開されることになった。これに伴って本稿では、これを作成するまでの大まかな流れを報告する。断っておくが、報告者を含め阪大班には、ウェブ化に関する専門家はいない²。しかしむしろ非専門家が実際にウェブディクショナリーに携わり、具体的に何を行い何に苦労したかを述べることは、自身の研究成果のデジタル化に関心はあっても、その具体的技術に詳しくはない斯学の研究者にとって、何ほどか資する所もあるかと思われる。また識者の方々からは、阪大班ウェブディクショナリーについて、改善すべき点などご指導頂ければ幸甚である。

以下、まず【ウェブディクショナリー公開までの大まかな流れ】を報告する。その後、これを通じて班内で議論されたいくつかの点を、【今後の課題】としてまとめる。

2 ウェブディクショナリー公開までの大まかな流れ

今回のウェブディクショナリーは、『榎本ほか 2014』をウェブ上で再現したものである。この為に阪大班が行ったのは、XML データと XSLT プログラムの作成である。

まず XML データの作成について、元となるデータ

は、『榎本ほか 2014』出版の為に作成した Word ファイルが既に手元にある。従って後述する XML データの構造が策定されれば、後はその構造に沿って基本的にコピー&ペーストでデータが作成できる。この段階になれば、技術的には全くの非専門家であっても一応は作業可能である。

次に XSLT プログラムについて、これは大まかに言えば、一定の構造に沿って記述された XML データから、指定した条件に一致するデータを、指定した書式で読み出させるものである。これにより、『榎本ほか 2014』のレイアウトを再現する。今回の様に『榎本ほか 2014』の再現という、定まった形式での出力という程であれば、プログラミングの初歩的な条件分岐やループが理解出来ていれば、比較的容易に作成可能であった。そこで今回の報告では XML データ構造のみを報告し、XSLT プログラムについては割愛する。

以上の様に、阪大班が行なったのは XML データ、XSLT プログラムの作成までである。これ以降の処理は高橋氏が行い、阪大班ウェブディクショナリーが公開されることになった。

XML データ構造の策定

XML データの作成に先んじて、まずはデータが従う一定の構造を策定しなければならない。策定にあたり、TEI (Text Encoding Initiative) の推奨する

¹ 榎本文雄 (代表)、河豊、名和隆乾、畑昌利、古川洋平、『ブツダゴサの著作に至るパリー文献の五位七十五法対応語』、*Bibliotheca Indologica et Buddhologica* 17, 山喜房佛書林, 2014.

² 作業は高橋晃一氏 (東京大学) からの全面的な協力のもとに行った。本稿執筆に際しても多くご教示を頂いた。同氏には深く感謝申し上げる。ただしウェブディクショナリー及び本稿における稚拙さや不備などは全て阪大班に帰する。なお、データ入力には、相原江里子氏 (大阪大学博士前期課程) からも協力を得た。この場を借りて感謝申し上げる。

ガイドライン (P5)、特に dictionary module を参考にした³。XML はごく簡潔には、データを入れ子構造的にマークアップしていく言語である。一方、辞書も入れ子構造から成ると看做し得る。すなわち下図の様に、一冊の辞書の中では一定の排列で見出し語が並ぶ。見出し語の下には、意味が1つ以上設定されて並ぶ。そして、設定された意味の根拠となる用例が1つ以上並ぶ⁴。

辞書

見出し語 1.

設定される意味 1.1.

用例 1.1.1.

用例 1.1.2.

.....

設定される意味 1.2.

用例 1.2.1.

用例 1.2.2.

見出し語 2.

設定される意味 2.1.

用例 2.1.1.

用例 2.1.2.

.....

設定される意味 2.2.

.....

『榎本ほか 2014』も、おおよそ上記構造を有する。そこで『榎本ほか 2014』の全見出し語に共通する構造を抽出し、XML で記述すると、おおよ次に示すサンプルのようになる。(詳細な構造は 8 頁を参照。)

サンプル

```

<entry>
  <form>
    ⋮
  </form>
  <sense>
    ⋮
  </sense>
  <note>
    ⋮
  </>
  <note type="example">
    ⋮
  </note>
  <note type="reference">
    ⋮
  </note>
</entry>

```

} <form> 要素：見出し語の基本語形に関する情報。…①
 } <sense> 要素：見出し語の語義を決定するための原典資料に関する情報。…②
 } <note> 要素：漢訳語に関する情報。…③
 } <note> 要素：補足的な用例。アビダンマなど。…④
 } <note> 要素：その他の内容。『榎本ほか 2014』の【参考】欄の記述に相当。…⑤

} <entry> 要素：「見出し語」「語義説明」「用例」など、辞書の一項目分の情報を収める。

³ XML はその名 (Extensible Markup Language. 「拡張可能なマークアップ言語」) の通り、比較的自由にデータをマークアップすることができる。この仕様によって柔軟な対応が可能である一方、人によってマークアップが異なることになって、データの共有が困難になる恐れがある。そこでひとまず TEI の推奨するタグセットに従っておけば、そうした事態を防ぐことが出来る。つまり、いわばマークアップの共通のルールとして TEI の推奨するタグセットを利用している。TEI:P5 は以下の URL を参照。<http://www.tei-c.org/release/doc/tei-p5-doc/en/html/>

⁴ 例えば PW (Otto BÖTLINGK & Rudolf ROTH, *Sanskrit Wörterbuch*, 7 Bde., St. Peterburg, 1855-1875) や CPD (Vilhelm TRENCKNER et al., *A Critical Pāli Dictionary*, 3 vols., Copenhagen, 1924-2011), DOP (Margaret CONE, *A Dictionary of Pāli*, Oxford, 2001-) は、基本的に上の図の様な構造を取っている。

ウェブディクショナリー作成に際して今回最も困難だったのが、全見出し語に共通する構造を導き出す作業である。策定してみたデータ構造に、実際にデータを作成する過程で不備が見つかる、ということはいしばしばあった。そうなると、大まかな変更はなくとも細部を見直さねばならない。更に『榎本ほか2014』では、各見出し語の執筆者がそれぞれ異なる、という事情が加わる。書式に関する基本的な取り決めはあったが、細かい点は各見出し語担当者に任されていた。この様な場合、全見出し語に共通する構造を導き出すのは更に容易でなくなる。しかし構造の抽出が適切に済めば、後は機械的に用例登録していくだけで中身が充実し、強力なツールと化していくことが期待される。また、この様に一定の構造のもとにデータが記述されることで、後から必要なデータを柔軟に取り出すことが出来る⁵。以下、本稿末のサンプルに沿って、使用したXML要素について説明していく⁶。(右上) ↗

サンプルの説明

さてまず、サンプルの最初に `<entry>` 要素がある。当該要素が、辞書でいう1つの見出し語のまとまりを表している。その要素の内容 (`<entry>`~`</entry>` で囲まれる部分) には、子要素⁷として要素①~⑤が収められる。

要素①<form> 要素について

要素①は `<form>` 要素、すなわち見出し語の語形を記述する箇所である。語形は `<orth>` 要素⁸内に記述する。パーリ語形かサンスクリット語形かの区別は、`<orth>` 要素の `@xml:lang` 属性の値として“pi” (パーリ語を表す) や “sa” (サンスクリット語を表す) を記入することで行う⁹。更に、異形 (例えば *viriya* / *vīriya*) を併記する場合は次の様に記述する。(左下) ↙

`<form>` 要素 (基本語形に関する情報)

```
<form>
  <orth xml:lang="pi">viriya</orth>
  <orth xml:lang="pi" type="variant">vīriya</orth>
  <orth xml:lang="sa">vīrya</orth>
</form>
```

上記の様に、`<orth>` 要素に `@type="variant"` 属性を加え、要素の内容に異形 (*vīriya*) を記入する。この他、『榎本ほか2014』では見出し語の横に漢訳語も併記しているが、漢訳語は訳語であるから語形の問題とは異なる。故に漢訳語は要素③の様に `<note>` 要素とし、`<form>` 要素とは別に記述する。

この `<note>` 要素の子要素に位置する `<cit>` 要素については次項で詳しく述べる。`@xml:lang` 属性値 “zh” は「中国語」を表す。

要素②<sense> 要素について

次いで要素②の `<sense>` 要素は、辞書でいう設

⁵ しかし同時に、データ構造に内容が束縛される可能性も考えられる。

⁶ サンプルでは `<entry>` 要素から開始しているが、本来ならこれより前にヘッダーなどが記述される。本稿ではヘッダーなどについては割愛する。

⁷ 子要素とは、例えばコンピュータにおいて、フォルダ A 内にファイル B があった場合、ファイル B はフォルダ A の「子要素」といった関係をいう。他にも、フォルダ A はファイル B の「親要素」など、いくつかの表現があるが、本稿では「子要素」の意味がご理解頂ければ充分である。

⁸ 要素名は、“orth[ographic form]” に由来する。Cf. TEI P5 (s.v. `<orth>`: <http://www.tei-c.org/release/doc/tei-p5-doc/en/html/ref-orth.html>, 閲覧日: 15年11月14日)

⁹ これら言語に関する略号 (sa や pi, 後述する zh など) は、ISO 639 という世界標準規格によるもので、TEI P5 はそれに準拠している。

定される意味を記述する箇所である。見出し語に対して意味が複数設定されていれば、その数に応じて `<sense>` 要素が繰り返される。

`<sense>` 要素の子要素である `<cit xml:lang="pi">` 要素¹⁰には、設定された意味の根拠となる用例（つまり本プロジェクトでいう「定義的用例」）を記述する。この `<cit xml:lang="pi">` 要素は、次の3つの子要素から成る：（右上）↗

- `<def>` 要素：定義的用例の原文を記入する箇所。原文中の見出し語は `<term>` 要素内に記入する¹¹。
- `<source>` 要素：定義的用例の出典を記入する箇所。
- `<cit type="translation">` 要素：`@xml:lang="ja"` 属性のもの、`@xml:lang="en"` 属性のものがある。それぞれの要素の内容として、定義的用例に対する和訳、英訳を記入する。見出し語に対する訳語は `<translation>` 要素内に記入する¹²。（左下）↙

`<sense>` 要素（語義を決定するための原典資料に関する情報）

```

<sense>
  <cit>
    <def><!-- パーリ語原典テキスト --></def>
    <source>
      <!-- 出典に関する情報 -->
    </source>
    <cit type="translation" xml:lang="ja"><!-- 上記テキストの和訳 --></cit>
    <cit type="translation" xml:lang="en"><!-- 上記テキストの英訳 --></cit>
  </cit>
</sense>

```

以上によって1つの `<cit>` 要素が構成される。登録される用例が複数あれば、その数に応じて `<cit>` 要素が繰り返される。

要素④ `<note type="example">` 要素について

要素③（漢訳情報）については上述したので繰り返さず、要素④、すなわち `<note type="example">` 要素の説明に移る。その子要素には上述の `<cit xml:lang="pi">` 要素と同じものが収められる。`<note type="example">` 要素には、その文字列から想像される様に、補足的な用例を記述する。具体的には、『榎本ほか 2014』におけるアビダンマの用例が収められている。何故アビダンマの例を、`<sense>` 要素の子要素ではなく `<note type="example">` 要

素の子要素として記述するのか。`<sense>` 要素の子要素には、既に述べた様に、設定される意味の根拠となる用例が記述されねばならない。しかしアビダンマの用例は基本的に類語の列挙に過ぎず、設定される意味の根拠とならない場合もしばしばある。それ故、`<sense>` 要素ではなく別に `<note type="example">` 要素を設定し、そこにアビダンマの用例を収めた。

要素⑤ `<note type="reference">` について

要素⑤、すなわち `<note type="reference">` 要素は、『榎本ほか 2014』の【参考】欄を記述する箇所である。当該箇所の書式は執筆者によって様々であり、一定の構造化が困難であった。故に当該要素に関し

¹⁰ 要素名 `<cit>` は “cit[ed quotation]” に由来する。Cf. TEI P5 (s.v. `<cit>`): <http://www.tei-c.org/release/doc/tei-p5-doc/en/html/ref-cit.html>. 閲覧日: 15年11月15日)

¹¹ e.g. idha bhikkhave ariyasvako raddha `<term type="noun">viriyō</term>` viharati.

¹² e.g. 托鉢修行者達よ、今ここに、立派な弟子は `<translation type="noun" form="勇敢さ">勇敢さ</translation>` を発動している者として ... (報告者註: 中略) ... 時を過ごします。ただし、`<translation>` タグはパウダコーシャ・プロジェクトが独自に設定したタグである。

ては、TEI ガイドラインに準拠せず、html の書式で記述した。

上に述べた構造に沿って、『榎本ほか 2014』の XML データを作成した。実際には更に細かい工夫もあるが、大まかな構造は上述の通りである。この様にして XML データを作成した後、XSLT プログラムなどによってレイアウトを行い、ウェブ上で公開となる。

3 今後の課題

以下では、ウェブディクショナリー公開までの作業を通じて、阪大研の中で議論された点を、今後の課題としてまとめておく。

デジタル化に関わる技術の浸透について

今後の課題として第 1 に挙げたいのは、デジタル化に関わる技術を浸透させることである。阪大研ウェブディクショナリーの作成は、班内に専門家不在の状態から出発した。そこでまずは、主に高橋氏のご指導を通して、他にも書籍やウェブの情報を頼りに、技術の習得から行わねばならなかった。しかしこの様な技術習得が、例えば教育カリキュラムの中に組み込まれていれば、時間や手間の多くは省けたことと思われる。また班内での議論もより深いものとなったことと思われる。今後、斯学においてサンスクリット語などの習得が当然であると同程度とまで行かずとも、デジタル化に際して技術の習得に困らない程度には技術を浸透させていくことが、1 つの課題として挙げられる。

データ構造について

『榎本ほか 2014』では、見出し語の意味内容の提示に有用であれば、同一語根から派生した動詞形でも名詞形でも用例を登録している。この手続きは、当該見出し語のそもそもの意味内容を決定する手続きとしては適切と考えられる。『榎本ほか 2014』は、この手続き自体をも提示している。しかしこれによって、通常の辞書（例えば PW や CPD, DOP）とは構

成が異なっている。通常、見出し語は、同一語根からの派生形であっても、動詞形と名詞形とは別々に挙げられる。では、『榎本ほか 2014』のデータを如何に記述するのか。

これには差し当たり、2 つの対処法が考えられる。第 1 は通常の辞書に合わせ、見出し語と同一語形の用例のみを登録する方法である。第 2 は、語根を <entry> 要素に据え、その下に動詞形や名詞形を登録する方法である。MAYRHOFER の語源辞典¹³がこれに近い構成を有する。阪大研では今回、後者に近い方法を採用した。この問題は、デジタル辞書のデータ構造が如何なるものであるべきか、ということと関連する。今後議論を深めていくべき課題であると考えられる。

質的な課題

今回のウェブディクショナリー公開は、『榎本ほか 2014』を単に再現したという程に過ぎない。故に現状程度であれば、PDF で充分との意見も予想される。しかしデジタル化した事で、紙幅の制約が無い、必要なデータのみを表示させることが可能、関連情報へのハイパーリンクを張ることが可能、そしてこれらの継続的なアップデートが可能、等といった利点がある。これらを今後活かしていけば、斯学に少なからず資することが期待される。しかし同時に、継続的なアップデートが可能である故に、その学術的信頼性に関する議論も必要であると考えられる。

おわりに

既に公開されているウェブサイトの中には、斯学の研究を推し進めるのにもはや欠かせないツールとなっているものもある。また昨今、科研等の応募書類等に「ウェブにて公開予定」との趣旨を記すのはもはや常識である。ところが、そうしたデジタル化を支える技術について議論されることは、斯学ではこれまで決して多くはなかった様に思われる。技術の評価基準が定まっているのか、またそれは何が出来、何が出来ないのかといった線引きの議論が何処まで

¹³ Manfred MAYRHOFER, *Etymologisches Wörterbuch des Altindoirischen*, 3 Bde., Heidelberg, 1986-2001.

進んでいるのかも疑問である。こうした現状の背景として、「デジタル技術は一部専門家のもの」という認識が未だ強いことが、1 つには挙げられる。そうした技術に学習コストを払うよりはエンドユーザのままできて、自身は専門たる文献研究に専念したい、との思いを抱く斯学の研究者は少なくあるまい。一定の年齢層以上においてデジタル技術が未だ一般的

素養でない傾向があるのは、近年の目覚ましい技術的進歩を顧みれば、一面には仕方のないことである。こうした中でパウッダコーシャ・プロジェクトが、仏教用語の現代基準訳語の提案と併行して、恐らくは技術の浸透や議論の活性化をも企図しつつ、学術的なウェブディクショナリーの作成に動いている意義は大きいものと思われる。

サンプルの全体

```

<entry>
  <form>
    <orth xml:lang="pi"><!-- パーリ語形 --></orth>
    <orth xml:lang="sa"><!-- サンスクリット語形 --></orth>
  </form>
  <sense>
    <cit xml:lang="pi">
      <def><!-- 定義的用例 --></def>
      <source><!-- 書誌情報 --></source>
      <cit xml:lang="ja" type="translation"><!-- 和訳 --></cit>
      <cit xml:lang="en" type="translation"><!-- 英訳 --></cit>
    </cit>
  </sense>
  <note>
    <cit xml:lang="zh" type="translation">
      <p><!-- 漢訳語 --></p>
      <source><!-- 書誌情報 --></source>
    </cit>
  </note>
  <note type="example">
    <cit xml:lang="pi">
      <def><!-- パーリ文 --></def>
      <source><!-- 書誌情報 --></source>
      <cit xml:lang="ja" type="translation"><!-- 和訳 --></cit>
      <cit xml:lang="en" type="translation"><!-- 英訳 --></cit>
    </cit>
  </note>
  <note type="reference"><!-- 【参考】欄 --></note>
</entry>

```


「仏教論理学・認識論関連用語の定義的用例集」の作成に向けて —pratyakṣa の用例を中心に—

三代 舞

(早稲田大学)

1 はじめに

本稿は、科学研究費補助金基盤研究 (S) プロジェクト「仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 (パウダコーシャ) の構築」における岩田・山部研究班の活動報告である。本班は仏教論理学・認識論における用語の調査を担当しており、仏教論理学・認識論関連用語の定義的用例集作成に向けて準備を進めてきた。作業の総括として、以下に、用例の収集に使用した文献および用語選定における指針を示し、用例集のサンプルを挙げる。

2 用例の収集に使用した文献

仏教論理学・認識論はインド後期大乘仏教の潮流の中に位置付けられ、ディグナーガ (Dignāga、陳那、ca. 480—540) に始まり、ダルマキールティ (Dharmakīrti、法称、ca. 600—660)¹によって大成された。その後の思想家の著作では、仏教内外の他学派との対話を通じた議論の深まりや解釈の変更等は見られるものの、仏教論理学・認識論の体系はこの両者の時点ではほぼ完成していると言ってよい。彼等が仏教論理学・認識論に関して体系的に論じた主な著作は以下の通りである²。

	書名	著者	略号	現在利用可能な資料
1	<i>Nyāyamukha</i> 『因明正理門論』	ディグナーガ	NM	漢
2	<i>Pramāṇasamuccaya</i>		PS	(梵) ³ 蔵
3	<i>Nyāyapraveśaka</i> ⁴ 『因明入正理論』	シャンカラスヴァーミン	NPr	梵蔵 ⁵ 漢
4	<i>Pramāṇavārttika</i>	ダルマキールティ	PV	梵蔵
5	<i>Pramāṇaviniścaya</i>		PVin	梵蔵
6	<i>Nyāyabindu</i>		NB	梵蔵

¹ 両者の年代については、暫定的に Erich Frauwallner “Landmarks in the History of Indian Logic,” (*Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens*, 5, 1961, 125—148) に従う。ダルマキールティについては、近年 Helmut Krasser “Bhāviveka, Dharmakīrti and Kumāriḥ” (船山徹『中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性』、平成 19 年度～平成 22 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書 (課題番号 19320010)、195—242) が、主にパーヴィヴェーカの *Madhyamakahrdayakārikā* およびそれに対する註釈 *Tarkajvālā* の記述に基づいて、パーヴィヴェーカがダルマキールティおよび同時代のクマーリラの説を知っていたと考え、改めて 6 世紀中頃という年代設定を提示した。

² ディグナーガおよびダルマキールティの著作とその関連資料については、塚本啓祥他『梵語仏典の研究 IV 論書篇』(平楽寺書店、1990)、410—445 等を参照せよ。

³ ジネンドラブッディ (Jinendrabuddhi, ca. 710—770) による注釈 *Viśālāmālavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā* (以下 PST) からの回取による。一部の章のみが公開されている。

⁴ *Nyāyapraveśaka* については、著者および書名に関して異説がある。まず著者については、蔵訳がディグナーガとするのに対して、漢訳はその弟子シャンカラスヴァーミン (Śaṅkarasvāmin、商羯羅塞縛彌：商羯羅主：骨瑣主：天主、ca. 500—560) とする。サンスクリット語資料には直接的な手がかりが見つかからないものの、ディグナーガの著作であることが確実な『因明正理門論』や PS との内容比較によれば、別の著者によるものであることが推察される。また書名については、蔵訳および漢文資料に示される音写によれば *Nyāyapraveśa* が想定されるのに対して、インドに残る写本の奥書や注釈中で言及されるのは *Nyāyapraveśaka* という名称である。稲見 [2011: 22—26] に、これらの問題に関する研究史のまとめと新たな考察が提示されている。

⁵ 蔵訳には、サンスクリット語原文からの翻訳 (NPrT1) と漢訳からの重訳 (NPrT2) の二種がある。稲見 [2011: 19—20] が報

この中でも特に、その内容が広範であることや後代への影響が大きいことから注目すべきは、4. *Pramāṇavārttika* (以下 PV) と 5. *Pramāṇaviniścaya* (以下 PVin) とである⁶。PV と PVin の関係については、PV が 2. *Pramāṇasamuccaya* (以下 PS) に対する注釈として著されたのに対して、PVin はその内容を整理し取捨選択しながらダルマキールティが自らの体系に沿って再構築したものとされる。よって、PVin を基本文献として設定すれば、充実した仏教論理学・認識論関連用語の定義的用例集の作成が見込まれよう。

しかしながら、PVin は近年サンスクリット語テキストが出版されたばかりでその解説研究は未だ途上にあるため⁷、現段階でまとめた用例集を作成するのは困難である。そこでひとまず、PVin の内容を簡潔にまとめたものとされる 6. *Nyāyabindu* (以下 NB) に着目することにした。これについては既に多くの研究蓄積があるので、用例の収集が容易である。

さらに、漢訳も射程に入れるならば、仏教論理学・認識論に関する著作の中では唯一、梵蔵漢の3種がそろった 3. *Nyāyapraveśaka* (『因明入正理論』、以下 NPr) は無視できない。これは NB とはやや異なる体系を示しているものの、共通する概念が多く扱われており、定義的用例や訳例の採取には有用である。また、2. *Nyāyamukha* (『因明正理門論』、以下 NM) については、現状では漢訳しか参照できないので、補助的な利用に留める⁸。

以上のような状況に鑑みて、本班では使用文献に関する次のような方針を定めた。

1. 当座の目標として NB に基づく用例の収集を行う。
2. 必要に応じて NPr 等の他の文献も扱う。
3. PVin に基づく網羅的な用例の収集を視野に入れる。

なお注釈については、ダルモータラの *Nyāyabinduṭīkā* (以下 NBṬ) を中心に扱うことにした。PVin に対しても同じくダルモータラの注釈 *Pramāṇaviniścayaṭīkā* が残されており、NBṬ と共通する内容も多い。よって、将来的な PVin に基づく用例集作成のための下準備としても必要な作業となる。

3 用語選定における指針

定義的用例集の作成にあたりまず問題となるのが、どのような用語を項目として選定するかという点である。仏教論理学・認識論の論師たちは、ニヤヤ学派等の仏教外部からの影響を強く受けており、従来の仏教用語とは一線を画した術語を使用している。よって本班の場合には、他の研究班のような『俱舍論』の五位七十五法に準じた形での項目選定による用例集の作成は望めない⁹。

また、仏教論理学・認識論に関する用語の現代語訳については、既に中村元「インド論理学の理解のために II インド論理学・術語集成—邦訳のこころ

告するように、前者 (NPrT1) は、四大チベット大蔵経のうち、北京版 (P5706 Ce 180b2—184b6) とナルタン版 (N3697 Ce 183b1—188a4) にのみ収められている。一方後者 (NPrT2) は、北京版 (P5707 Ce 184b—189a7)、ナルタン版 (N3698 Ce 188a4—193b)、デルゲ版 (D4208 Ce 88b5—93a1)、チョーネ版 (Ce 88b2—92b6) のすべてに伝えられている。しかし、いずれの翻訳においても問題が多い。

⁶ 実際、後代の思想家たちは多く、これらに対する注釈という体裁を取りながら自らの思想を提示した。仏教論理学・認識論に関して体系的に論じた後代の文献としては、シャーンタラクシタの *Tattvasaṃgraha* やモークシャーカラグプタの *Tarkabhāṣā*、作者不詳の *Tarkarahasya* などが挙げられる。

⁷ PVin に関する本班の研究結果としては、岩田孝「認証 (saṃvedana) による対象と知識の非別性論証再考」(『東方學』にて近刊予定) および「ダルモータラの saṃvedana 論証解釈」(『三友健容博士古稀記念論文集』にて近刊予定) などがある。

⁸ NM については、桂紹隆氏による一連の研究(『因明正理門論研究 [一] ~ [七]』『広島大学文学部紀要』37—46、1977—1987)があり、近年新たに PST から類似表現の回収が進められている (Shoryu Katsura, “A Report on the Study of Sanskrit Manuscript of the *Pramāṇasamuccayaṭīkā* Chapter 4.” 『印度學仏教学研究』にて近刊予定)。また、加納和雄「アティシヤに由来するレティン寺旧蔵の梵文写本—1934年のチベットにおける梵本調査を起点として」(『インド論理学研究』4、123—161) 152 等が報告するように、レティン寺旧蔵のサンスクリット語写本が存在する。

⁹ これまでに発表されたパウダコーシャプロジェクトの用例集には、齋藤明他『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集』(山喜房佛書林、2011)、『瑜伽行派の五位百法』(山喜房佛書林、2014)、榎本文雄他『ブッダゴースアの著作に至るパリー文献の五位七十五法対応語』(山喜房佛書林、2011) があり、いずれも五位七十五法の体系に準じた項目選定を前提としている。

み」(『法華文化研究』9、1983)という先駆的な研究がある。これは、ダルマキールティの用いている術語を中心に、思想交流があったと思しきニヤーヤ、ヴァイシェーシカ、サーンキヤ、ヨーガ等の諸学派の文献からも論理学に関する議論を適宜採集し、正確な内容理解のために、漢訳語を離れた現代語による邦訳を試みたものである。これはまさに本パウッダコーシャプロジェクトが目指すところと軌を一にするものであり、大いに参照すべきである。

その中で中村元は、「この語彙で扱った諸事項をいづれ体系的に整理せねばならぬが、これをどのように体系化したらよいか、わたくしは考えあぐんでいる」と述べる¹⁰。そこで本班では、用語を選定する際の指針として、まずは体系化ということを重視することにした。すなわち、『俱舍論』の五位七十五法の体系に相当するような、仏教論理学・認識論における主要概念の体系的配置を明らかにし、それに沿った形で項目を選定することにした。

実際に、当面の基本資料としたNBは、「正しい知」(samyajñānaあるいはpramāṇa)の視点から、諸概念を整理し、簡潔に説明したものである。よって、

ダルマキールティの教説の軸となる概念を拾い上げることは比較的容易であった。その結果整理された主要概念の配置は、図：「*Nyāyabindu*に基づくダルマキールティの論理学・認識論の体系」(本稿末尾に掲載)の通りである。

この図は、NBの中から抽出された主要概念をそれぞれ四角で囲み、その相互の関係を線によって示したものである。そして、それぞれの四角の中には、該当するNBの箇所情報と、当該の概念を説明する中で用いられる付随的な概念を括弧に入れて提示した。相互の関係を示すための個別の情報がテキスト中にある場合には、その箇所情報や関係性も線の上に示してある。また、概念を抽出する際には、それに対して定義的な説明が与えられているかどうかを重視した。

本班では、このように作成された本図に沿って、用例集作成のための項目を選定した。当然のことながら、ここに記載されたものの他にも、仏教論理学・認識論の内容を理解する上で重要な概念は多くある。しかし、それらに関しても、必要に応じてこの図に付加することで十分対応することができよう。

4 サンプルの提示

pratyakṣa

【訳例】¹¹ [日] 知覚 (梶山 [1975])、直接知覚 (中村 [1983])、直接知 (早島 [1987])
 [英] perception (Hattori [1968]), direct perception (Funayama [1993]), direct knowledge (Stcherbatsky [1930]), direct cognition, perceptual awareness (Dunne [2004])
 [独] die Wahrnehmung (Vetter [1966])

【藏訳】 mngon sum

【漢訳】 現量

¹⁰ 中村 [1983: 5-6]。

¹¹ 訳例および各々の出典については、代表的なもののみを記載した。

【定義的用例】¹²

[和訳]

その（知覚と推論（*anumāna*）という二種の正しい知）のうち、知覚とは、概念的構想を離れ、錯覚でないものである。概念的（言語的）構想とは、言語表現と結びつく可能性のある現れをもった知的作用である。それを欠いており、眼病、[松明などの] 速い回転、[速く]^a船で行くこと、[体液の] 乱れなど [の原因] による錯誤^bが引き起こされていない知が、知覚である。それは4種（感官知・意識・自己認識・ヨーガ行者の知）^cである。

^a DhPr 55, 18–19: *āśugrahaṇena nauyānam* api viśeṣaṇīyam. maṇḍam hi gacchantaṃ nāvi na gacchadvṛkṣādidaśanaṃ bhavātīty anubhavasiddham etat (「速い」という語によって、「船で行くこと」も限定されるべきである。なぜならば、船がゆっくり進行する場合には、進行する木などを見ることはない、というこのことは経験上成立しているからである)。

^b NBṬ 55, 1–6: *timiram akṣnor viplavaḥ. indriyagataṃ idaṃ vibhramakāraṇam. āsubhramaṇam alātādeḥ. maṇḍam hi bhramyamāṇe 'lātādau na cakrabhrāntir utpadyate. tadartham āśugrahaṇena viśeṣyate bhramaṇam. etac ca viśayagataṃ vibhramakāraṇam. nāvā gamanaṃ nauyānam. gacchantaṃ nāvi sthitasya gacchadvṛkṣādibhrāntir utpadyata iti yānagrahaṇam. etac ca bāhyāśrayasthitaṃ vibhramakāraṇam. samkṣobho vātapiṭtasleṣmaṇām. vātādiṣu hi kṣobhaṃ gateṣu jvalitastambhādibhrāntir utpadyate. etac ca adhyātmagataṃ vibhramakāraṇam* (眼病とは、両眼の異常である。これは、感官にある錯誤の原因である。速い回転とは、松明などの[回転]である。というのも、松明などがゆっくり回されている時には、輪の錯覚は起こらない。そのために、「速い」という語によって回転が限定されている。そしてこれは、対象にある錯誤の原因である。船で行くこととは、船によって行くことである。進行している船に乗っている人には、進行する木などの錯覚が起こる。よって、「船」という語が[使用されている]。そしてこれは、外的な拠り所にある錯誤の原因である。乱れとは、ヴァータ・ピッタ・シュレーシュマナ（三種の体液）の[乱れ]である。すなわち、ヴァータなどが乱れた状態になると、燃える柱などの錯覚が起こる。そしてこれは、内的なものにある錯誤の原因である)。

^c NB I 8–11: *indriyajñānam // svaviśayānantaraviśayasahakāriṇā indriyajñānena samanantarapratyayena janitaṃ tan manovijñānam // sarvacittacaittānām ātmasaṃvedanam // bhūtārthabhāvanāprakaśaparyantaṃ yogaṃ yogijñānam ceti //* (1. 感官知と、2. [感官知] 自身の対象の直後の対象を協働因とする、感官知という等無間縁によって生じたもの、それが意識であり、3. あらゆる心および心所の自己認識と、4. 真実の対象に対する修習の高まりの極限から生じたヨーガ行者の知、という [4種である])。

[原文]

tatra pratyakṣam kalpanāpoḍham abhrāntam // abhilāpasamsargayogyapratibhāsā pratīḥ kalpanā // tayā rahitam timirāsubhramaṇanauyānasamkṣobhādyanāhitavibhramaṃ jñānam pratyakṣam // tat caturvidham // (NB I 4–7)

¹² 以下に引用するテキストでは、パンクチュエーションを適宜挿入、削除した。

¹³ プトンの目録やデルゲ版のコロフォン等はゴクローツァーワ・ローデンシュェーラプ (rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab, 1059–1109) を訳者と記すが、西藏大蔵経に含まれる NB の蔵訳には問題のある箇所が多く、優れた翻訳官として知られる彼のものにしては不自然である。Horst Lasic, “Tabo *tshad ma* materials” (Birgit Kellner et al. (eds.), *Pramāṇakīrtiḥ*, Universitāt Wien, Wien, 2007), 489–491 は、ギェルツァブジェ・タルマリントゥエン (rGyal tshab rje Dar ma rin chen, 1364–1432) に従って、その翻訳が、ヴィニータデーヴァの *Nyāyabindutīkā* と同じくジナミトラ (Jinamitra)、ダーナシーラ (Dānaśīla)、イエーシェーデー (Ye shes sde, いずれも 8–9 世紀頃) によるものである可能性を示唆している。

[蔵訳]¹³

de la mngon sum ni / rtog pa dang bral zhing ma 'khrul pa'o // rtog pa ni / shes
pa la brjod pa dang 'drer rung ba snang ba ste^a / de dang bral ba'o // ^brab rib dang
/ myur du bskor ba dang / grur zhugs pa dang / 'khrug pa (D; 'khrul ba P) la sogs
pas 'khrul pa ma bskyed (P; skyes D) pa'i shes pa ni mngon sum mo // de ni rnam
pa bzhi ste / (D 231a2—3, P 329b3—5)

^a サンスクリット語原文とは構文が異なる。原文では、「概念的構想とは、……現れをもった知的作用である」というように、概念的構想という主題に対して知的作用という述部が示されるのに対して、蔵訳では、「概念的構想とは、知における……現れである」というように、現れを述部とする。また、pratiti に対しては rtogs pa という訳語が一般的であるが、ここでは jñāna の訳語としてよく用いられる shes pa が使われる。

^b サンスクリット語原文とは文の切り方が異なる。

【その他の定義的用例】

Nyāyapraveśaka (『因明入正理論』)

[和訳]

そのうち、知覚とは概念的構想を離れたものである。色・形などの対象に対する、名称、類など^aの概念的構想を欠いた知であって、それは[視覚器官、聴覚器官などの]それぞれの感官に関して起こるといふ[語源解釈]により、知覚である。

^a PS によれば、名称 (nāman) と類 (jāti) の他に、属性 (guṇa)、行為 (kriyā)、実体 (dravya) が挙げられる。詳しくは Hattori [1968: 25] を見よ。

[原文]

tatra pratyakṣam kalpanāpoḍham. yaj jñānam arthe rūpādau nāmajātyādi-
kalpanārahitaṃ, tad akṣam akṣam prati vartata iti pratyakṣam. (NPr 50, 13—14)

[蔵訳]

de la mngon sum rtog pa dang bral ba ste / shes pa gang gzugs la sogs pa'i don
la ming dang rigs la sogs pa'i rtog pa dang bral ba de dbang po so'i dbang po
la^ayod pa ni mngon sum zhes pa'o // (NPrT1 N 187a7—b1, P 184a2—3)

^a “akṣam akṣam prati” を “dbang po so'i dbang po la” と蔵訳する。

[漢訳]^a

此中、現量、謂、無分別。若有正智於色等義離名種等所有分別、現現別轉、故名現量。^b
(T32, 12b27—29)

^a 漢訳からの重訳による蔵訳は以下の通りである。NPrT2 (D 92a4, P 188a7—8): 'dir mngon sum tshad ma ni rtog pa dang bral zhing ma 'khrul pa (P; ba(?) D) ste / gzugs la sogs pa'i don la tha snyad la sogs pa'i rtog pa dang bral ba so sor mngon gyur mthong bas mngon sum tshad mar brjod do //. ここでは、サンスクリット語原文およびそれからの翻訳のいずれにも見られない “ma 'khrul pa” (*abhrānta) というダルマキールティ以降の定義内容が付加されている点、また、「名種」(nāmajāti) を “tha snyad”、「現現別轉」(akṣam akṣam prati vartate) を “so sor mngon gyur mthong ba” と訳している点に注目すべきである。

^b NM に見られる類似表現については、桂紹隆「因明正理門論 [五]」(『広島大学文学部紀要』42、1982、82—99)、84—85 を見よ。

5 訳語に関する考察

「知覚」

pratyakṣa に対する「知覚」という訳語は、訳語を考える際に、語源に則した意味と実際の用例に則した意味とのいずれを重視すべきかという問題を孕んでいる¹⁴。確かに、NPr 等に示されるような“akṣa”「感官」に基づく語源解釈に則せば¹⁵、「知覚」に類する訳語が導かれる。しかし、NB において示されるように、pratyakṣa には、感官知 (indriyajñāna) のみならず、意識 (manovijñāna) や自己認識 (ātmasaṃvedana)、ヨーガ行者の知 (yogijñāna) も含まれる。よって、専ら感官知を意味する「知覚」¹⁶およびそれに類する「直接知覚」という訳語は、ダルマキールティの意図する範囲を網羅しない恐れがある。

「直接知覚」

この問題意識は中村 [1983] でも共有されており、「直接知覚」という訳語について以下のような説明が付されている。「日本語としては明らかに「知覚」である。しかしダルマキールティはヨーガ行者の神秘的体験をも pratyakṣa の中に含めるのであるから、それを含めるために「直接」という語を付して、「直

接知覚」と訳すことにした。ただ「知覚」だけだと、感官を通じての知覚のみと解せられる恐れがあるからである」(中村 [1983: 140])。しかし、このような意味で「直接」の語を理解するのは困難であろう。

これまで広く用いられている「直接知覚」という訳語における「直接」という語は、必ずしも明確な意味を与えられていない。一つには、「対象を直証する」(arthasākṣātkārin) すなわち「直接的に捉える」という pratyakṣa の特徴を意図して用いられている可能性が考えられる¹⁷。特に、仏教論理学・認識論の場合には、「言語表現と結びつく可能性のある現れをもった概念的構想を離れた」というダルマキールティの定義に示されるように、概念的構想を含まないもののみが pratyakṣa として認められ¹⁸、その直接性がより厳密に受け止められている。概念的構想を含まない知覚(無分別知覚)と含む知覚(有分別知覚)の両方を認めるニヤーヤ学派等との対比においては、「直接」という限定詞は有効であろう。

しかし、近現代の哲学、心理学における用例と照らし合わせてみると、「直接知覚」(direct perception) という訳語は誤解を招く恐れがある。近代の伝統的な知覚理論、すなわち、意識の直接的な対象は心の中に存在する観念であって、外界の対象はその観念を介して間接的に知られるという間接知覚説に対立

¹⁴ この問題について、NBṬでは以下のように述べる。NBṬ 38, 3-6: akṣāśritatvaṃ ca vyutpattinimittaṃ śabdasya, na tu pravṛttinimittaṃ. anena tv akṣāśritatvenaikārthasamavetaṃ arthasākṣātkāritvaṃ lakṣyate. tad eva śabdasya pravṛttinimittaṃ. tatas ca yat kiṃcid arthasya sākṣātkāri jñānam, tat pratyakṣam ucyate (さらに、感官に依拠したものであることは、語の語源解釈の根拠ではあるが、適用の根拠ではない。しかし、この感官に依拠したものであることによって、同一の対象に内在する、対象を直証するものであることが表示されている。それ(対象を直証するものであること)こそが、語の適用の根拠である。まさにこのことから、およそ何であれ対象を直証する知、それが知覚であると言われているのである)。

¹⁵ pratyakṣa の語源解釈については、Hattori [1968: 77] 等を参照せよ。なお、ディグナーガが NPr に示されるような不変複合語 (avyayībhāva) による解釈をとるのに対して、ダルモツタラはそれを離れ、格限定複合語 (tatpuruṣa) の一種である gati 複合語による解釈を示す。NBṬ 38, 1-3: **pratyakṣam** iti pratigatam āśritam akṣam. “atyādayaḥ krāntādyarthe dviṭīyayā” iti samāsaḥ (pratyakṣa とは、感官に近づいた、すなわち依拠したもの [と語源解釈される]。「ati など [の接頭辞] は、「卓越した」などの意味で、対格の語と [複合語を作る] という [規則による] 複合語である)。

¹⁶ 「知覚」(perception) の語は、現代の脳科学や心理学、哲学の用法では多くの場合、感覚器官を通じて刺激を受容する感覚(いわゆる五感や自らの身体の状態を感知する深部感覚など)と、それらの感覚を自覚的な体験として処理するプロセスを指す(感覚と知覚の関係については異論がある)。例えば、「知覚とは、感覚器官への物理化学刺激を通じてもたらされた情報をもとに、外界の対象の性質、形態、関係および身体内部の状態を把握するはたらきのこと」と説明される(石田裕昭「知覚」『脳科学辞典』、<https://bsd.neuroinf.jp/wiki/知覚>、2015年11月20日)。しかし、必ずしも感覚器官に付随する認識作用のみを指すわけではない。例えば、テレパシーや透視などを指す「超感覚的知覚」(extrasensory perception, ESP) といった用法もある。この中には、ヨーガ行者の知なども含まれる。

¹⁷ ダルモツタラはこの特徴を、pratyakṣa の語を適用するための根拠とする。注 14 を見よ。

¹⁸ 仏教論理学・認識論における pratyakṣa の定義の変遷については、Funayama [1993: 44-45] 等を、インド思想一般における定義については佐藤裕之「インドにおける知覚の定義方法」(『印度學佛教學研究』45-2, 1997, (73)-(77)) 等を参照せよ。

¹⁹ ジェームズ・ギブソン (James Gibson, 1904-79) などによって提唱された。間接知覚と直接知覚については、中島英司「感覚

するものとして、外的対象を直接に知覚するという直接知覚説は位置付けられている¹⁹。ダルマキールティ達の基本的な知覚のモデルは、むしろ間接知覚説に近い。彼らによれば、我々が実際に捉えているのは、外的な対象によって知の中に投げ入れられた対象の形象（知覚表象）に他ならない²⁰。

「直接知」

感官知以外のものをも包括するような意味をもつ訳語としては、「直接知」という訳語がある。この訳語は、先にも取り上げたように、「対象を直証する」(arthasākṣātkārin) という pratyakṣa の特徴に基づくものであり、「概念的構想を離れた」というダルマキールティの定義にも則している。「錯覚でない」という定義をも含意させるためには、「正しい」「無謬なる」という語を付けてもよい。

さらに、この訳語は、知であることが明示されているという点で優れている。定義的用例によれば、ここでの pratyakṣa は「知」(jñāna) を指し示すものに他ならない²¹。特に NB の場合には、「正しい知」(samyagjñāna) の下位項目として提示されることからそのことが確認できる。一方、NPr や PS、PV、PVin といった他の著作においては、pratyakṣa は pramāṇa の下位項目として示される。pramāṇa の語は、“pramīyate 'neneti pramāṇam” 「これによって認識 (pra vma) されるから認識手段である」²² という語源解釈に表されるように、認識の手段として理解されるのが一般的であり、特に後代のニヤーヤ学派等ではその傾向が顕著である。しか

し、仏教論理学・認識論ではむしろ pramāṇa を主に結果としての認識すなわち知に対して用いながら、文脈に応じて認識手段に対しても用いる²³。よって、その下位項目である pratyakṣa も、やはり主に知を指し示すことになる。

しかし、「直接知」という訳語には、pratyakṣa というサンスクリット語との対応を了解しない読者に対して具体的なイメージを与えにくいという問題点がある。また、「直接知覚」の場合と同様に、「直接」という語が誤解を生む危険もある。その点では、完全には一致しないとしても、ある程度近いイメージを与えうる「知覚」という訳語が優勢であろう。さらに情報を加えるならば、「正しい知覚知」という訳語も考えられる。

6 おわりに

このように本班では、仏教論理学・認識論関連用語の定義的用例集作成にあたり、NB に基づく主要概念の見取り図を作成した上で、それに従って、体系的な用語の選定を試みた。用語集の作成においては、項目の選定が初歩段階における大きな課題となるが、その対処方法の一例を示しえたのではないと思う。

また、現代基準訳語については、それが定義的用例と合わせて提示される以上、できる限りその定義内容に則した訳語を提示すべきである。しかし、異なる言語の中から、完全に一致する意味内容をもつ語を見つけることは容易ではない。よって、読者に対してある程度近いイメージを与える語を一般的な現代日本語の用法の中から探し出し、便宜的に訳

と知覚との区別について—トマス・リードの直接知覚説（『鹿屋体育大学紀要』6、1991、<http://www2.lib.nifs-k.ac.jp/HPBU/annals/an6/6-197.pdf>）198の説明を参照した。

²⁰ 梶山雄一『仏教における存在と知識』（紀伊國屋書店、1983）x等を参照せよ。

²¹ 仏教論理学・認識論において、「知」(jñāna)とは、瞬間的に生滅する実体として存在するものであり、先後の知はある種の因果関係によって結ばれている。また、知は基本的に何らかの対象形象をもって生じており、そこにその形象が立ち現れる「場」のようなものとして考えることもできる。「知識」あるいは「認識」と訳されることも多い。

²² 例えば、*Nyāyavārttika* 89, 5–6 (*Nyāyasūtra: Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyāṭikā & Viśvanātha's Vṛtti*, eds. Taranatha Nyaya-Tarkatirtha, Amarendramohan Tarkatirtha and Hematakumar Tarkatirtha, 2 vols., Munshiram Manoharlal Publishers, Calcutta, 1936–44), *Nyāyamāñjarī* 38, 15 (*Nyāyamāñjarī of Jayantabhaṭṭa with Ṭippanī*, Vol. I, ed. S. N. Varadacharya, Oriental Research Institute, Mysore, 1969) ad 1.1.3 などに見える。

²³ この問題に関する仏教認識論とニヤーヤ学派の立場については、拙稿「プラマーナ (pramāṇa) という語のもつ二つの意味とその関係—仏教論理学派とニヤーヤ学派」（『久遠—研究論文集』3、2012、52–68）で考察した。

語として採用するという譲歩も必要であろう。 る更に充実した用例集の作成を目指し、作業を継続
 以上のような方針の下に、NB および PVin によ する予定である。

<略号および 1 次文献>

- D デルゲ版西藏大蔵経.
 N ナルタン版西藏大蔵経.
 P 北京版西藏大蔵経.
 T 大正新脩大蔵経.
 NB *Nyāyabindu* (Darmakīrti): see DhPr.
 NBṬ *Nyāyabinduṭīkā* (Dharmottara): see DhPr.
 NM *Nyāyamukha* (Dignāga).
 NPr *Nyāyapraveśaka* (Śāṅkarasvāmin/Dignāga): *Nyāyapraveśakaśāstra of Bauddha Ācārya Diñnāga*, ed. Muni Jambuvijaya, Motilal Banarsidass, Delhi, 2009.
 NPrT1 NPr に対するサンスクリット原典からの蔵訳.
 NPrT2 NPr に対する漢訳からの重訳.
 PS *Pramāṇasamuccaya* (Dignāga).
 PV *Pramāṇavārttika* (Dharmakīrti).
 PVin *Pramāṇaviniścaya* (Dharmakīrti).

<参考文献>

- Dunne [2004]
 John D. Dunne, *Foundation of Dharmakīrti's Philosophy*, Wisdom Publications, Somerville, 2004.
 Funayama [1993]
 Toru Funayama, "A Study of *kalpanāpoḍha*: A Translation of the *Tattvasaṃgraha* vv. 1212—1263 by Śāntarakṣita and the *Tattvasaṃgrahapañjikā* by Kamalaśīla on the Definition of Direct Perception," *Zinbun* 27, 1993, 33—128.
 Hattori [1968]
 Masaaki Hattori, *Dignāga, On Perception*, Harvard University Press, Cambridge, 1968.
 早島 [1987]
 早島鏡正監修『仏教・インド思想辞典』春秋社、1987。
 稲見 [2011]
 稲見正浩「インド仏教論理学の受容と展開—西藏・中国・日本」『異文化理解教育と宗教』平成 22 年度東京学芸大学重点研究報告書、2011、1—32。
 梶山 [1975]
 梶山雄一『論理のことば』中公文庫、1975。

中村 [1983]

中村元「インド論理学の理解のために II インド論理学・術語集成一邦訳のころみ」『法華文化研究』9、1983。

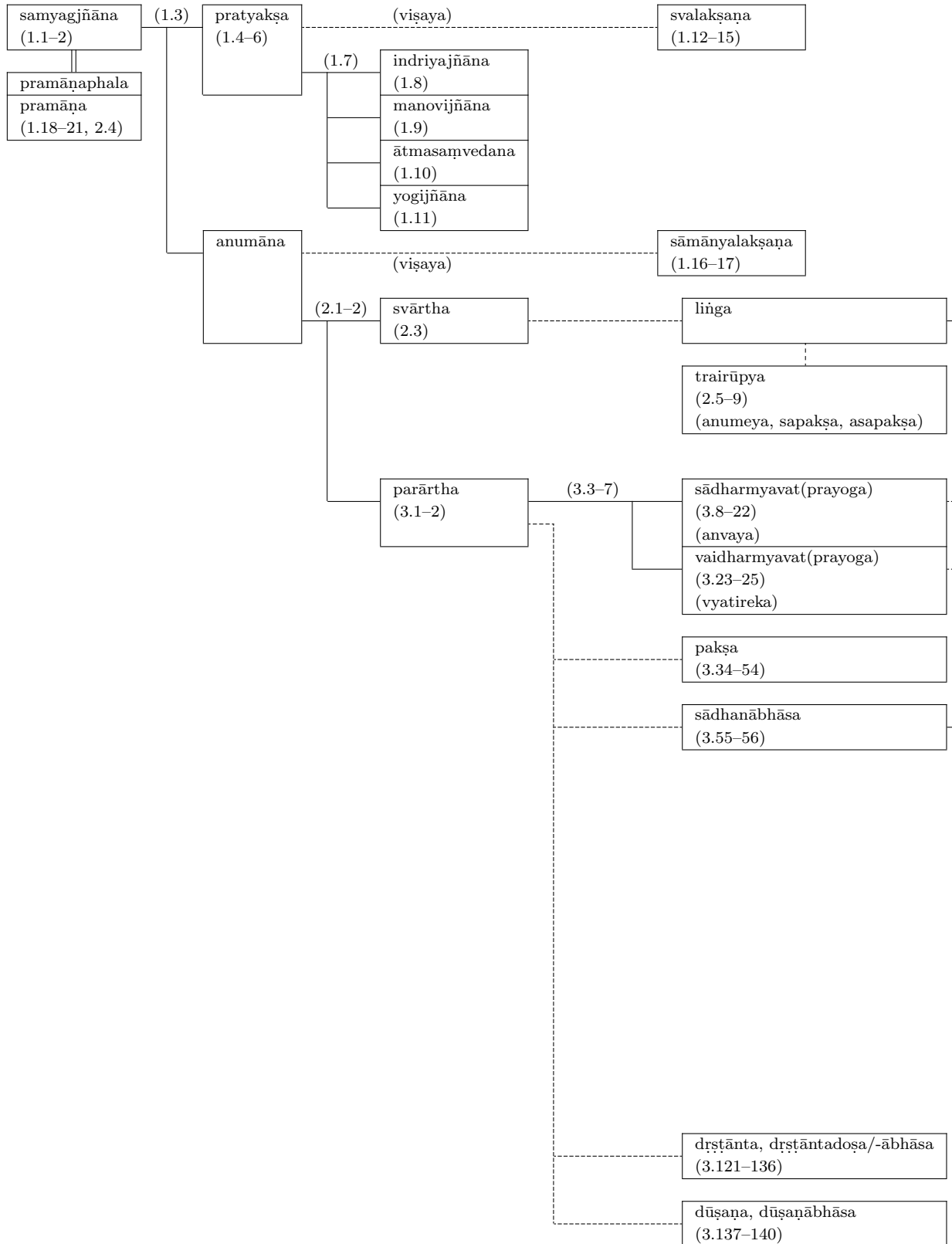
Stcherbatsky [1930]

Theodore Stcherbatsky, *Buddhist Logic*, Vol. 2, Bibliotheca Buddhica 26.

Vetter [1966]

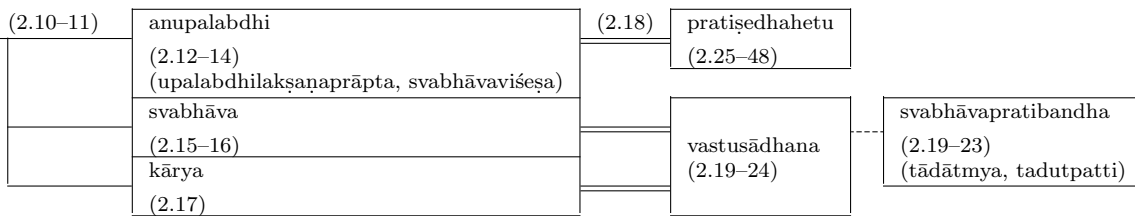
Tillemann Vetter, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniśayaḥ, 1 Kapitel: Pratyakṣam*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien, 1966.

Nyāyabindu に基づくダルマキールティの

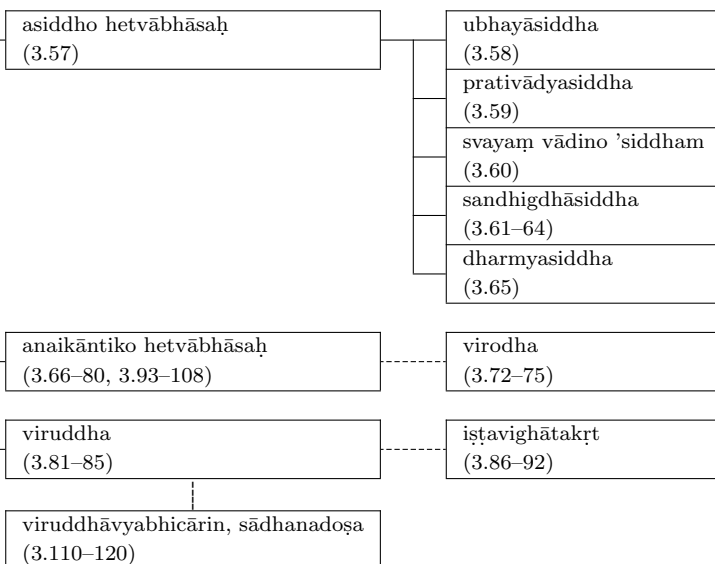


論理学・認識論の体系

———— 下位分類
 ===== ほぼ同じもの
 - - - - - その他の関係



(3.26-33)



スタッフ

研究代表者

齋藤 明
(東京大学大学院人文社会系研究科・教授)
「総括+インド大乘仏教経論」

研究分担者

榎本 文雄
(大阪大学大学院文学研究科・教授)
「初期仏教関連用語」
室寺 義仁
(滋賀医科大学・教授)
「初期瑜伽行派関連用語」
佐久間秀範
(筑波大学大学院人文社会科学部研究科・教授)
「瑜伽行唯識思想関連用語」
宮崎 泉
(京都大学大学院文学研究科・准教授)
「インド中観思想及びチベット仏教思想関連」
山部 能宣
(早稲田大学大学院文学研究科・教授)
「仏教論理学・認識論関連用語」
桜井 宗信
(東北大学大学院文学研究科・教授)
「インド密教関連用語」

連携研究者

石井 公成 (駒澤大学仏教学部・教授)
岩田 孝 (早稲田大学・名誉教授)
永ノ尾 信悟 (東京大学・名誉教授)
桂 紹隆 (広島大学・名誉教授)
久間 泰賢 (三重大学人文学部・准教授)
下田 正弘 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)
末木 文美士 (東京大学・名誉教授)
馬場 紀寿 (東京大学東洋文化研究所・准教授)
丸井 浩 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)
袁翰 顕量 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)
渡辺 章悟 (東洋大学文学部・教授)

研究協力者

Charles Muller
(東京大学大学院人文社会系研究科・特任教授)
Paul Harrison
(Stanford Univ. Professor)
Jonathan Silk (Leiden Univ. Professor)
ツルティム・ケサン (大谷大学・名誉教授)
永崎 研宣 (人文情報学研究所・所長)
苦米地 等流 (人文情報学研究所・専任研究員)
叶 少勇 (北京大学・准教授)
何 歆歆 (浙江大学・教授)
高橋 晃一 (齋藤研究班)

加藤 弘二郎 (齋藤研究班)
堀内 俊郎 (齋藤研究班)
石田 尚敬 (齋藤研究班)
松田 訓典 (齋藤研究班)
一色 大悟 (齋藤研究班)
得能 公明 (齋藤研究班)
新作 慶明 (齋藤研究班)
鄭 祥教 (齋藤研究班)
崔 境真 (齋藤研究班)
Thomas Newhall (齋藤研究班)
楊 潔 (齋藤研究班)
清水 尚史 (齋藤研究班)
河 豊 (榎本研究班)
畑 昌利 (榎本研究班)
名和 隆乾 (榎本研究班)
古川 洋平 (榎本研究班)
岡田 英作 (室寺研究班)
高務 祐輝 (室寺研究班)
横山 剛 (宮崎研究班)
三代 舞 (山部研究班)
真鍋 智裕 (山部研究班)
佐藤 晃 (山部研究班)
佐々木 亮 (山部研究班)
菊谷 竜太 (桜井研究班)

編集後記

昨年 11 月下旬にウェブ版パウダコーシャを更新し、「パリー文献の五位七十五法対応語」を追加いたしました。これは大阪大学研究班の成果である『ブッダゴーサの著作に至るパリー文献の五位七十五法対応語』(2014 年、山喜房仏書林)に基づくウェブディクショナリーです。本誌 (pp.3-8) に関連記事を掲載しております。ご高覧いただければ幸いに存じます。また、早稲田大学研究班の成果に関する報告も掲載しております (pp.9-19)。pratyakṣa の訳語に関する検討とダルマキールティの認識論・論理学の体系を整理したチャートは最新の研究成果です。こちらもご参照下さいますようお願い申し上げます。

Bauddhakośa Newsletter 第 5 号 (2016 年 2 月 17 日発行)

発行元: Bauddhakośa プロジェクト (The Creation of Bauddhakośa : A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences [Grant-in-Aid for Scientific Research(S)])

〒113-0033

東京都文京区本郷 7 丁目 3 番 1 号

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

インド哲学仏教学研究室内

E-mail:b_kosha@l.u-tokyo.ac.jp

印刷 株式会社 サンワ

Bauddhakośa プロジェクトの研究成果は、以下の URL よりご覧いただけます。

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html